「山月記」の自尊心と羞恥心

藤本千鶴子

一

中島敦の「山月記」（『文学界』昭和17・2）が読者に与える感動については、「架空の人間映像をあれほど生々しく読ませた」（中村光夫「青春と教養——中島敦について」『批評』昭和18・4）、「これほど切々と私たちの胸を打つものは何か。それは芸術至上主義的な名作がもたらす芸術的な陶酔だけではない。何か痛切な悲しみをもって身に迫ってくるものがある。」（深田久彌「中島敦君の作品」『昭和文学全集35』月報、昭和29・4角川書店）をはじめとして、諸氏ほぼ一致して、切実感を挙げている。

それは、生身の中島敦をよく知る者だけが「虎に化した李徴の慟哭の中に、君の声を聞」く（深田久弥、同右）からであろうか。たしかに、李徴の悲しみや苦しみは、すでに「かめれおん日記」や「狼疾記」に書かれたものと類似している点もあるという点で、中島敦の声と言えよう。が、中島敦の人格を知らない者、これらの作品を読まないで「山月記」だけを読んだ者にも、同様の感動が生じる。学生たちはまるで自分のことを言われているようだという反応を示した。「山月記」の感動の特質は、人ごととして高見から同情するのではなく、誰もがわがこととして痛切に感じさせられるところにあるのではないか。

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」にさいなまれているのは、何も「己の場合」、中島敦の場合の特殊事情なのではなく、程度の差、意識と無意識の差はあれ、だれしもがそうなのではあ

るまいか。臼井吉見氏は、この作品を、「少数のひとのなかに生きつづけるにちがいない」（「中島敦の文学」『展望』昭和23・12）としたが、少数の、「詩人として名を成」そうとする芸術家肌の人、「性、狷介、自ら恃むところ頗る厚」い性情の持ち主、「博学才穎」の知識人という要素の、いくつかまたは全てを有する者だけが、李徴に共感するのではないらしい。この作品は、「周囲の健康な人々」（「かめれおん日記」）さえ共感させる。すなわち、特別詩才もなく「職吏に甘んじている人、「温和な哀愁」のような性情の人、「鈍物として歯牙にもかけなかった連中」など、この世の大多数の我々凡人も、「山月記」に触発されて、苦痛とともに自我の秘密に思い当たる。ということは、「山月記」は、すべての人の心の底に潜む自我の影の部分――常は意識にのぼらず、時に意識はしてもそのたびに押し殺し、他人にも気取られないように隠している――暗い原像に触れた作品なのではあるまいか。

このような観点から、「山月記」が提示した、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」とは何か、ということを検討してみたい。

二

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」とは何かということについて、これまでは、このことばで行き止まりのものが多く、解釈を試みたものもあるが、いずれも充分納得がいかない。

まず、松村明敏氏は「中島敦の『山月記』」（『国文学』昭和33・8）において、李徴の場合、自尊心と羞恥心に、それぞれ「臆病な」「尊大な」という修飾語がついているという特殊性に着目して、自尊心と羞恥心とを、「優越感・劣等感」という「別の言葉におきかえて」解釈し、「劣等感をかくすために尊大な態度をよそおい、しかも優越感の面においては劣等感にたえず悩まされるが故に臆病な消極的な態度」になったとする。

この場合「優越感・劣等感」に置き換えることは、適切と言えるかどうか。李徴には、「劣等感をかくすため」とか、「劣等感にたえず悩まされるが故に」とかいう「劣等感」の実体そのものがない。逆に、己は「珠」のはずであり、他者はすべて「瓦」だという固定観念が、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の根底にあるのである。

また、浜川勝彦氏は「『山月記』」（『国語国文』昭和46・8）において、「『臆病な自尊心』と『尊大な羞恥心』とが同一のものであり、この相反するものが一になったという二律背反」と解釈した。融合して一になれば、もはや二律背反ではないはず

だが、それはそれとして、右の根拠として、第一に、「共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。」の、「『と』という助詞は、他者の並列ではなく、上下が等しいものであることを意味する特殊な用法」だということを挙げる。作者がわざわざ「――と、――との」と両者を明確に区別した表記をしているのを無視するのは納得がいかない。第二の根拠としては、「臆病な自尊心を飼ひふとらせる」に「わざわざ点を施し、『臆病な自尊心』が獣化するのを明示し」、他方、「『尊大な羞恥心が猛獣だつた。』と表現することにより、この二つが同一のものであることを語っている。」としている。「飼ひふと」っているものすべて「猛獣」とは限るまい。「臆病な自尊心」の方は、「刻苦を厭ふ怠惰」で醜く「ふと」っているのであり、「尊大な羞恥心」の方は、「妻子を苦しめ、友人を傷つけ」、まさしく人喰虎の「外形」に匹敵する獰猛な「内心」なのだ。「臆病な自尊心を飼ひふとらせる」と、「尊大な羞恥心が猛獣だつた」とは、字義通り、作者が虎の二面性、李徴の「内心」の二面性を区別して描き分けているものであろう。

第三の根拠としては、草稿に、

人間は誰も猛獣使ひで、それぞれ自分の性情がその猛獣に当るんださうだが、全くボクの場合、自尊心といふやつが、猛獣でしたよ。ねえ。全く。自尊心と、それから、もう一つ、羞恥心、こいつが曲者でね。大人しさうで決してさうでない。ハイエナかジャカアルみたいな奴ですね。ライオンにいつもジャカアルがついてゐるやうに、自尊心にいつもこの羞恥心がくつついてゐるんだ。害をする点ではライオンよりジャカアルの方がひどいんですよ。ライオンは誰だつて警戒するが、ジャカアルには誰も余り警戒を払はないからね。

とあるのを引用して、草稿のライオンとジャカアルの二匹の獣が、「山月記」では一匹の獣になっていることをもって、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が「境界線を消して同一に」なったとし、「草稿の『自尊心』も『尊大な羞恥心』も同じものと見てよい。」とした。だが、「人虎伝」の筋を借りる限り、一人の李徴がライオンとジャカアル二匹に変身してはおかしいのであって、二匹が一匹になったから両者同一だということにならない。また、草稿では「臆病な」「尊大な」という修飾がまだついていない。ことばを発明していないということは、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の恐るべき実体の認識に至っていないということである。このように、いずれも決定的根拠としては弱いと言える。

むしろ、「同一のもの」と考えることによって、かえって「山月記」が我々に提示した問題はあいまいになり、混乱したと思う。

たとえば浜川氏は、「己の詩業に半ば絶望したためでもある。」とある、「半ば」に注目したのはすぐれているとして、「まったく絶望した」ではなく『半ば』という程度にとどめたのは、彼の心底にひそむ『尊大な羞恥心』にほかならない。」と解釈する。ここは「自尊心」とすべきではないのか。なぜなら己の才能に望みを残したい働きは、羞恥心ではなく自尊心の問題だからである。

また、浜川氏と同じく「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」とを「同義」だとする立場を取る木村一信氏は、「『山月記』論」（『日本文学』昭和50・4）において、「『性情』そのものが李徴を虎に化するのではなく、『他者』とのかかわりの中で自らの『性情』をいわば負の方向に拡大させてしまったことが不幸の因」だとしている。作者自身が、「その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。（中略）己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。」と、明瞭に断定しているにもかかわらず、「性情」ではない、「他者」とのかかわり方の問題だとするのは、納得がしがたい。

このように、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」とを同一視する限り、混乱は避けられないのである。

三

わかりにくさの原因は、作品の側にもあるように思われる。松村氏の言うごとく、「臆病な」「尊大な」という修飾語がつくことによって、逆説的表現になっているためでもあるが、また、中島敦の漢詩文の教養からくる、対句的論理展開に、今日の読者が不慣れなためでもあろう。さらには、「自尊心」「羞恥心」の指し示す内容が、我々の意表を突くものだからだと思われる。

まず、対句的論理展開から見て行きたい。

草稿の「自尊心」と「羞恥心」から、どのようにして「山月記」の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」へと、発想の飛躍を遂げたのか。案外単純に漢詩の対句の技法から思いついたものかもしれない。実体験の執拗な観念操作によって思いついたとは限らない。それほどに、第五段（李徴の変身の原因）の自己分析は対句的展開の整然たる構造を成している。いわば、四頭立ての馬車に乗って、左右二列の馬に交互に鞭打ちつつ疾駆す

る趣と言うべきか。この構造に注目することが、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を解くカギではないかと思われる。

第五段は、「何故とんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。」で始まる。以下、「臆病な」をa、「自尊心」をA、「尊大な」をb、「羞恥心」をBとして、構造分析をしてみると、六つの対句ブロックに分けられる。

①人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。実はそれが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。

勿論、曾ての郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。

右は主題の言い起こし、「起」に当たる。人の目にさらされた外観と内心との乖離（浜川勝彦）、あるいは態度と心理との分裂（松村明敏）は、「起」にのみあてはまり、以下は人の目は無関係で、④の例に「――が故に」とあるごとく、内なる因果関係が分析される（aが原因でAがその結果、bが原因でBが結果）。

②己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。

かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。

③共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。

④己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず。

又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。

右の三対が、「起」の倨傲尊大に見える「羞恥心」、臆病なと限定のつく「自尊心」を「承」けて、それは具体的にどういうものであったかを展開した部分である。②④が、③の「臆病な自尊心と、尊大の羞恥心」の定義にあたる。「臆病な」とは、

比喩的に言えば、「己の珠に非ざることを惧れる」ことであり、「尊大な」とは、「己の珠なるべきを半ば信ずる」ことである以上、文脈上「自尊心」「羞恥心」の定義は、それぞれ点線A・Bでなくてはならない。すなわち、「自尊心」とは、「敢て刻苦して磨かうとも」しないことであり、「羞恥心」とは、「碌々として瓦に伍することも出来な」いことである。これは、なかなか変わった自尊心、羞恥心である。これについては後で考察する。

⑤ 己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と怠惰とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。

右は、一転して「虎」のイメージを現出した「転」である。「敢て刻苦して磨かうとも」しない「怠惰」な内心は、「飼ひふと」った虎の外形として映像化される。「瓦に伍すること」を恥じる内心は、己の人格破壊を起こし、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、哀傷に飛びかかった人喰虎の外形と重ねられる。ここにおいて李徴は、虎の外形を「理由も分らずに押し付けられた」運命だと恨むことをやめ、「内心にふさわしい」運命の必然と理解した。否定的自己発見である。木下順二氏風に言えば、「山月記」のドラマは、詩人李徴と俗人との対立ではなく、李徴自身の否定的発見のドラマであるということがわかる。

⑥ 今思へば、全く、己は、己の有つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだつたのだ。

己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気づいた。

右は「結」である。「今思へば」の今、「今、――気づいた」の今とは、一年程前、虎に変身した時ではない。「転」の部の否定的自己発見を契機として、「今」李徴は新たな目を獲得し

たのである。警句の「何事をも為さぬ」は「瓦」たちのことであり、「何事をか為す」のは「珠なるべき」己のことであるが、今や自分がかつて警句を弄していたのは自己欺瞞をしていたにすぎないことに気づき、「事実」が見えてきた。何が「己の凡てだつた」かが見えてきた。公平客観の目で見れば、結果的には「何事をか為す」はずの己は「才能を空費し」たのに対し、「何事をも為さぬ」はずの同輩たちは「堂々たる詩家となつた」。その原因は彼らが「瓦」ではなく、単に「己よりも遙かに乏しい才能」だったに過ぎないということが見えてきた。天才か俗物かではなく、磨く磨かないの差なのであった。「事実」というものはつらいものである。だが、それと引換えにものがわかったのである。哀愁が「しかし、この儘では、第一流の作品となるには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」と思った、その欠ける所とは、自他に対する公平客観の目であろう。偏った主観をぶつけるのではなく、「事実」が見えなくてはならないということであろう。今なら李徹は第一流の作品が書ける。だがもう遅いのである。「それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる。」以下の慟哭は、決して大仰な身ぶりではない。

ともあれ、虎になった原因を自己分析している部分の構造は、単純化してみると、

起　bB——AaA
承　A　——B
　　aA——bB
　　aA——bB
転　aA——bB
結　A'aA——B'

という、整然たる対句的論理展開になっていることがわかった。したがって、「^{a}臆病な自尊心^{A}」と「^{b}尊大な羞恥心^{B}」との間に論理の混線や融合はないと言える。

そこで次には、一見、奇妙な「自尊心」と奇妙な「羞恥心」の内容について考えてみたい。

四

我々は通例、「自尊心はないのか。」とか、「羞恥心が欠けている。」とか、それらの欠如を批判的に言う。自尊心も羞恥心も、人として持つべきもの、プラスの価値と見ている。醜悪なもの、自他に害をなすものという見方はあまりしない。精神病患者の場合は今は問題としない。自尊心をもつとは、自らの品

位を落とさないように自重するということであり、セルフ・コントロールのもとである。自分を何かの点で優れていると誇りに思うことは、向上の原動力になる。自信は、生きていてよいという安心のもとである。羞恥心をもつとは、自分の劣っている点を素直に認めることであり、これは謙譲の美徳であって、また、反省して改めるもとになるものである。これらは、自尊心、羞恥心の光の部分ということができる。

ところが、「山月記」に書かれているのは、そういうわかりやすい自尊心や羞恥心ばかりではない。むろん、「若くして名を虎榜に連ね」たことを誇る無邪気な自尊心や、「昔、鈍物として歯牙にもかけなかつた其の連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷けたか」という用例は、一般的な用い方である。「おめ〳〵と故人の前にあさましい姿をさらせようか。」という「愧赧の念」（羞恥心）も、平生我々の経験するところである。

だが、変身の原因としての「自尊心」は、「敢て刻苦して磨かうともせず」、「進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた」を指す。変身の原因としての「羞恥心」は、「碌々として瓦に伍することも出来なかつた」、「俗物の間に伍することも潔としなかつた」を指す。これは、自尊心、羞恥心の影の部分であろう。ユングが「人が自分をまもるために他人に対して秘密にするものは、そういったもの、つまり、自分のなかにひそんでいるくらいのもの・不完全なもの・おろかなもの・良心の負担となるようなものばかりなのである。」（『ユング著作集2　現代人のたましい』昭45・6日本教文社、初出は一九二九年）としている「秘密」に関係しているらしい。隠病な、尊大なとは、抑圧され、屈折し、変形した自尊心、羞恥心なのではないかと思われる。

「自尊心」の方から見ていくと、「敢て刻苦して磨」かないのは、「天性優れたる者にとって、何の学ぶ必要があらうか？」（「弟子」）と豪語する、子路の倨傲と同じ理由によるかと思われるが、そうではない。逆に「己の珠に非ざることを惧れる（才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧）が故」に磨かないのである。李徴の自尊心のより所は詩才のみであるのに、「珠」（天才）だという確信が得られない。半ば信じ半ば疑い、自分に自信がないから不安である。そこで、才能の有無、全か無かを思い知らされる切磋琢磨の機会を徹底して避け通したのであった。自尊心のより所が不安定なために、それが脅かされることを恐れ、行動不能の怠惰に逃避したのである。

季徴の「刻苦して磨こうとも」しない怠惰な自尊心とは、実

は生きものの自己防衛本能に根ざしていることが知られる。そして、自尊心が脅かされた時の対応策として、李徴は「世と離れ、人と遠ざかり」という逃避を選んだのである。不安の対応策として(1)攻撃、(2)逃避・孤立、(3)従属の三つがある（ホーネィの理論）という（ジャーシルド『自己を見つめる』昭50・9創元社）。攻撃型としては森鷗外の戦闘的啓蒙が、従属型としては太宰治「人間失格」の道化がそれに相当するであろう。だが、李徴の場合も、単に逃避しただけではない。彼は「次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせ」たのである。この「憤悶」とは、江南尉の地位や詩家としての名声が上がらないことを憤り悶えたもので、「慙恚」とは俗物に伍することをはじいかったのであり、いずれも外に向かって攻撃する感情である。ただ、この激情は直接行為としては外に出さず、「帰臥」という逃避の形を取ったのであろう。無理に抑制された激情は出所を失い、「怏々として」、ついには発狂するに至った。「憤悶と慙恚」を抑制するのは、世間の逆襲を恐れるのみではなく、「憤悶と慙恚」がうしろ暗いからであろう。もともと才能への確信が持ちたいのに持てないという不安であるのに、それを任命権者や世評への怒りに転嫁したのであるから。

次に、「羞恥心」とは「碌々として瓦に伍する（俗物の間に伍する）」ことを不満に感じ恥じる心だという。これは、俗な言い方をするなら、「あいつらといっしょにされたくない」ということである。宮沢賢治の「よだかの星」に、「よだかは、実にみにくい鳥です。（中略）ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思ってゐましたので、夕方など、よだかにあふと、さまざまもいやさうに」したとある。同じく、よだかは風を切って翔けるさまと鳴声の鋭さとがどこか鷹に似ていたため、「鷹は、これをひじやうに気にかけて、いやがつてゐました。」とある。ここには羞恥心ということばは使われていないが、自分を珠だと思う者が、現実の自己とどこか似た瓦と同一視されることをいやがるという点では李徴と共通している。

李徴の場合はそれのみではない。彼が人間の姿であった頃、他人が皆「鈍物」「俗物」「瓦」に見え、上官は「俗悪な大官」に見えたのは、事実そうだったのではなく、李徴の主観にそう見えたにすぎない。彼が内なる俗念に気づかず、それを他に投影して憎み卑しんだのである（この点は「よだかの星」にはない。）。

たとえば、退職した時の彼は、一見名利を求めず「ひたすら詩作に耽」るためだったかに見えるが、実は、「江南尉」（尉は

昔、賊を討ち、獄をつかさどった官）を「賤吏」と見たからである。「若くして名を虎榜に連ね」た己ほどの人材の就職先としては、江南尉は才能にふさわしくない不満な地位だというわけである。「江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを深しとしなかった。」とあるのは、短い中にその事情をよく語っている。まだ挫折を知らない李徴は、この頃までは己の珠なることは自明であった。木村氏の言うごとく「詩人を志す自分は役人としての実生活に合致しない」というような高潔の人ではない。もっと高い名利のはずが、案に相違していたので屈辱感にたえず退職したのである。

また、「詩家としての名を死後百年に遺さうとした」のは清廉な人柄に見える。意識の上ではそうだったろう。ところがそのあとにすぐ「しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。」とあるように、死後の名声が待ち切れず、現世での、それも今の今名声がほしいという心根が見え隠れしている。経済的にも物欲しげである。このように、李徴の中には、内なる俗念が歴然とあるにもかかわらず、それを素直に認めようとはしない。自分をだまして、それにさえ気づかない。そして自己の俗念を恥じるかわりに、他者に俗念を投影して、彼らを「瓦」視し、彼らといっしょにされることを恥じたのである。単に「己よりも遙かに乏しい才能」であったというだけの人たち、「瓦」でもない人を理由なく「瓦」視することは、不当であるのみならず、醜悪残虐であさましい。

はじめ私は、虎の姿を「我が醜悪な今の外形」「我が醜悪な姿」「あさましい姿」「あさましい身に成り果てた」とする表現につまづいたが、今は、目に見えぬ醜悪な自尊心と羞恥心を、醜悪残虐であさましい人喰虎という、目に見える象徴にした手腕に感嘆している。因みに、虎のイメージは、李徴が豊頬の美少年であった頃から一貫していて、「虎榜」は俊才が及第するのを虎にたとえたもの、「歯牙にもかけなかった」はのちの人喰虎への変身の伏線である。人間の外形の時かえって内心は虎であった。虎のような内心を理解した時、人間の姿の時よりも人間になった。

このことは、三度出てくる虎がほえるシーンが微妙に変奏していることともかかわっている。

木村氏は、「山月記」という題名は、即席詩の一節「此夕渓山対明月」から取られたとしたが、それでは説明不足ではあるまいか。むしろ「此夕渓山対明月　不成長嘯但成嗥」とすべきであり、山月をもって、その下で吼える虎の悲しみの所在を暗示したつけ方であろう。

だが、題をこの部分から取ったとしては、この詩と「山月記」の読後の感銘とは若干ずれるが故に、適切ではない。この詩の前書き相当部分に、「人虎伝」にはない自嘲の調子の語句をくり返したたみかけたがために、「人虎伝」の詩は自嘲詩に一変した。哀傷の地位を心から喜んで祝辞を送るのではなく、「蓬茅下」の己のあさましさと友への嫉妬が混じって見える。山月に吼える己が運命の悲惨を訴えるのではなく、自虐を笑い草にする不自然がある。

二つめのシーンは、自己の否定的発見に続く部分である。

どうすればいいのだ。己の空費された過去は？己は堪らなくなる。さういふ時、己は、向うの山の頂の巌に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かに此の苦しみが分って貰へないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、慄れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮ってゐるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分って呉れる者はない。丁度、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかったやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

ここには、自分の不安、後悔、悲しみ、苦しみ、孤独の感情が、せきを切ったように流露している。自己の内心を理解したことによって、抑制されていた感情が解放されたのである。我々の共感もまた、このような素直な叫びに素直に応じるのである。題名はむしろここから取られた、他はその変奏だと考えるべきではなかろうか。

三つめのシーンは結末部である。妻子のことを頼んだのち、哀傷の命を気づかって、醜悪な最後の姿を見せる部分である。

一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振り返って、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入って、再び其姿を見なかった。

実際に吼えるのは、実はこの永訣の時だけである。

自己を理解した李徴は、自我の安定を獲得し、他者を気づかう余裕が生じた。妻子や友人は、存在するに値しない「鈍物」「俗物」「瓦」ではなくなった。他人の生を理解したのである。もはや、悪しき感情をおし隠した自嘲でもなければ、感情の奔出でもなく、事態は悲痛ではあっても淋しい静かなあきらめが支配している。それだけに余韻が深い。

以上、李徹の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を分析して、自己保存本能がいかに詐術をこらして、人格破壊をし、他者を傷つけ、ついには自尊心のより所（自己の存在意義である才能）さえも奪い去り、自己の最も求めるものを自己が最も遠ざけるものかということを見てきた。また、そこからの救いは、そのような自己を理解することであるということを見てきた。このような、「自尊心」と「羞恥心」の影の部分は、今まで気づかずにきた人も、中島敦に指摘されてみれば、だれしも思い当たるふしがあろう。「山月記」の感動はそこから生じていると思うのである。